

立命館大学 大会要旨 滝澤修身(長崎純心大学人文学部教授)

平成30年6月30日に、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が正式にユネスコの世界遺産に登録された。潜伏キリシタンとは、1614年の江戸幕府によるキリスト教禁令によって、仏教徒を装いながら、神父不在のもと250年の長きに渡って隠れてキリスト教の信仰を守り続けた者たちである。ユネスコでの遺産登録以降、日本の歴史学会では「潜伏キリシタン」研究が興隆し、近年多くの出版物が刊行されている。私は、本件に関し、2012年から長崎県世界遺産登録推進室より「16世紀・17世紀の宣教師記録」の編纂を依頼され、研究員の一員として遺産登録事業に関わってきた。その結果は、『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保護調査報告書』(資料編1・2)(2013年)として出版され、今回の世界遺産登録の基本的な史料として利用された。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン」はユネスコの世界遺産登録はされたのではあるが、未だその登録の基礎となった世界遺産登録推進室の研究には、解決されていない大きな研究課題が幾つか存在する。「潜伏キリシタン」の遺産登録は、残存する物的証拠を研究することによって進められてきたが、その中でも潜伏キリシタンたちが使用してきた「信心用具」(宗教画、十字架、メダル、ロザリオ等)の所以や起源が未だ詳しく分析されていないのである。私は、この「信心用具」の分析を行いたい。

潜伏キリシタンとは一概に言っても、彼らの分布地域は幅広い。長崎県の平戸市、外海町、天草の作津集落など各地に散在している。そこで、調査対象地域を絞り込む必要がある。私は、キリシタンの里と呼ばれる「外海」に対象を絞りたい。「外海」は、遠藤周作氏の小説と映画『沈黙』の舞台になった村であり、長崎市内から離れた山里であったため、幕府のキリシタン穿鑿が入りにくく、多くの「潜伏キリシタン」が存続し、未だ彼らの末裔も多く現存しているからである。